

第2節 県下の輸入陶磁器

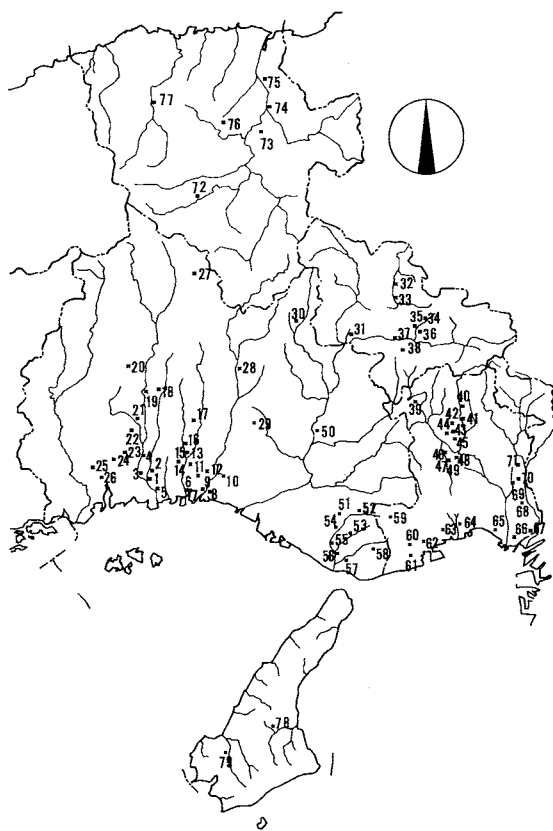
兵庫県下の輸入陶磁器を出土した遺跡の状況

県下で現在まで知られている輸入陶磁器を出土した遺跡は80数遺跡を数える。遺跡の種類としては、集落跡、居館跡、山城、平城、城下町、荘園遺跡、寺院跡、経塚などが含まれている。また、時期的には10世紀の前半から17世紀の前半に至る700年間に及んでいる。

ここでは、時代を追って、時期をⅠ期～Ⅷの8時期に区分し、それぞれの時期の通称のありかた及び出土遺物のありかたについて若干触れてみたい。

Ⅰ期（9～10世紀）

全国的にもそうであるが、この時期に属する輸入陶磁器を出土した遺跡は、県下でも非常に少ない。現在までに知られている遺跡としては、日高町襦布ヶ森西遺跡、三田市対中遺跡、川西市栄根遺跡、龍野市小犬丸遺跡、相生市下土井遺跡の計5遺跡があげられるに過ぎない。この内、日高町襦布ヶ森西遺跡からは邢州窯産と考えられる白磁の輪花碗及び越州窯系の青磁碗が、須恵器、土師器と共伴している。報告者は、この遺跡の性格を官衙もしくは官衙的性格をもった建物郡と考えており、この時期の出土例としては、注目に値する遺跡である。また、龍野市小犬丸遺跡も、古代山陽道布施駅の有力な推定地であるが、ここから出土しているのは僅かに越州窯系の青磁碗の破片が数点であるに過ぎない。相生市下土井遺跡からは高台を蛇ノ目状に成形する越州窯系青磁碗がほぼ完形で出土している。しかし、ここでも越州窯系と考えられるものはこの一点のみで、遺鉢の性格も、集落跡と考えられるだけで特殊な性格は認められない。三田市対中遺跡は奈良時代から中世に至る大規模な集落跡で、あるいは官衙的性格をもつものとも考えられる。しかし、出土した輸入



挿図379 兵庫県輸入陶磁器出土遺跡分布図

陶磁器は白磁碗のAⅠ類からAⅣ類、白磁皿のAⅠ類からAⅦ類が大部分を占め、越州窯系青磁と考えられるのは僅かに碗の破片が一点あるに過ぎない。あるいは越州窯系の青磁としても、時期の下がるものかも知れない。川西市栄根遺跡からも、10世紀前半に遡ると考えられる越州窯系青磁碗片が出土している。しかし、この遺跡の主要な遺構は弥生時代に属しており、また、この青磁碗に共伴する時期の遺物は認められない。

上記のように、県下では、邢州窯産の白磁及び越州窯系の青磁碗が5遺跡で確認されているがこの内、最も注目されているのは襦布ヶ森西遺跡の出土例である。この時期の輸入磁器は官衙あるいは寺院跡等に限られている。先にも述べたように、襦布ヶ森西遺跡は官衙的性格を強くもった遺跡であり、このことは全国的なこの時期の輸入磁器の受容のされかたと同様である。

Ⅱ期（11～12世紀中葉）

森田 勉氏によると太宰府あるいは博多遺跡群では11世紀前半からAⅠ～AⅦ類の白磁碗・皿が出土し、12世紀前半には、大量に受容されるとされている。

しかし、県下では、現在の所、11世紀代あるいは12世紀前半に遡る輸入磁器の出土例は知られていない。その一つの要因として、在地の土器の編年の研究の遅れが指摘される。

県下で時期決定を行う際のメルクマールになるものとして、東播系須恵器がある。東播系須恵器の内、特に神戸市神出産のものについては、12世紀前半にまで遡る可能性が考えられているが、現在の所、確実に12世紀前半の東播系須恵器に伴う輸入磁器は確認されていない。

最近、近畿自動車道舞鶴線建設に伴う発掘調査で10世紀から12世紀に至る丹波地域の須恵器生産のあり方が解明されつつある。今後、これら在地の土器の編年研究に伴って11世紀から12世紀前半に至る輸入磁器を抽出できる可能性が考えられる。

Ⅱ期（12世紀後半～13世紀前半）

県下における輸入磁器の受容は、このⅢ期に至って急激に増大し一つのピークを迎える。

輸入磁器を出土する遺跡の種類も、又輸入磁器の種類も非常に多彩となる。ここでは、集落跡、墓、経塚の順に概要を述べる。

①集落跡

集落跡には、多紀郡西紀町西木之部遺跡、宍粟郡安富町安富中学校前東遺跡、龍野市宝林寺北遺跡・福田天神遺跡、姫路市本町遺跡、三田市南台遺跡・下深田遺跡・対中遺跡、神戸市宅原遺跡・山田小学校内遺跡、尼崎市金楽寺貝塚、洲本市寺中遺跡、加東郡家原堂ノ前遺跡、豊岡市福成寺遺跡などがあって但馬から淡路までの全県下に広く分布している。しかし、分布の密度を見ると、播磨地区（特に西播磨）、摂津地区、丹波地区、但馬地区、淡路地区の順で、特に丹波、但馬、淡路の3地区では、その分布が疎らである。

出土通物には白磁碗AⅠ～AⅢ類、白磁皿AⅠ～AⅣ類、同安窯系青磁碗Ⅰ・Ⅱ類、同安窯系青磁皿Ⅰ～Ⅲ類、龍泉窯系青磁碗AⅠ・AⅡ類、BⅠ～BⅢ類、CⅠ・CⅡ類、それに極少

量であるが褐釉陶器などが含まれている。このような輸入磁器を出土する遺跡は、県下では概ね12世紀後半から13世紀前半の遺跡として報告される事が多い。

ただし、出土遺物を詳しく検討してみると、これらの遺跡は、3ないし4つのグループに区分する事ができる。すなわち、白磁の比率が高く、青磁の比率の低い遺跡（対中遺跡・寺中遺跡）、白磁と青磁の比率がほぼ等しい遺跡（福田天神遺跡・金楽寺遺跡）、青磁が出土遺物の主体となっている遺跡（家原堂ノ前遺跡・南台遺跡）などである。但し、これは、報告書に掲載されているものを算出したものであって、全出土量を計算したものではない。ただ、Ⅲ期に属すると考えられている遺跡には、出土遺物に相違のあることを指摘しておきたい。

②墓

この時期には、輸入磁器を土壙墓あるいは木棺墓に副葬する例が非常に多い。

輸入磁器を墓に副葬する遺跡としては、養父郡大屋町蔵垣遺跡、氷上郡春日町多利・前田遺跡、宍粟郡山崎町河東遺跡、龍野市福田天神遺跡・宝林北遺跡、揖保郡太子町川島遺跡、神戸市神出東遺跡、宅原遺跡、三由市下所遺跡・庵ノ谷中世墓などがある。

これらの墳墓では、輸入磁器を単一、もしくは複数、あるいは須恵器・土師器など在地の土器を伴って埋葬しているが、白磁と青磁あるいは、同安窯系青磁と龍泉窯系青磁、あるいは龍泉窯系青磁のA類もしくはB類、C類といった違った種類の組合せで副葬することはない。

例えば、福田片岡遺跡では白磁碗AⅡ類と白磁皿AⅠ類を、多利・前田遺跡では白磁の合子、小壺、皿を、宅原遺跡では龍泉窯系青磁碗C皿類を、神出東遺跡で龍泉窯系青磁碗BⅡ類を、副葬している。

このことから考えて、墳墓のように一括埋葬される輸入磁器には一定のセットが存在したものと考えられる。

③経塚

この時期に属する経塚も現在まで、県下で知られているもの60数遺跡ある。この内、輸入磁器を伴うものには、西紀町上板井経塚、加西市江ノ上1号経塚、神戸市滝ノ奥経塚、姫路市書写経塚、氷上郡山南町立石経塚、姫路市宮山第1経塚・甲山経塚、宍粟郡一宮町瀧の内経塚などがある。いずれも、平安時代後期から鎌倉時代前期つまり、ここでいうⅢ期に時期が求められている。出土した輸入磁器には、青白磁合子・壺、白磁合子・皿・碗などがあり、青白磁の合子・壺が大部分を占め、白磁の合子・壺がこれに次ぎ、青磁は僅かに1点のみである。

上記のように、県下ではⅢ期つまり12世紀後半から13世紀前半の時期に至ると、輸入磁器の受容が急激に増大し、又それらは、官衙的施設のみならず一般の集落にも及び、又墓あるいは経塚などへの副葬も増大する事が分かる。しかし、Ⅱ期には殆ど見られなかった輸入磁器が、Ⅲ期に至って何故に急激に増大するのか、全国的な傾向と軌を一つにするとは言え、この減少には奇異な点が少なからずある。

先にも触れたように、集落遺跡から出土する輸入磁器には白磁を主体とするもの、白磁と青磁がほぼ同一量のもの、青磁が主体となるものが指摘される。又、墓出土のものでは、白磁の合子・小壺など経塚の副葬品と同一の傾向を示すもの、白磁AⅡ類あるいはAⅣ類を副葬するもの、同安窯系青磁を副葬するもの、龍泉窯系青磁のA類を副葬するもの、B類を副葬するもの、C類を副葬するものなどがあり、青磁と白磁と一緒に副葬するものは認められない。このことから、Ⅲ期に比定されているものの中には、Ⅱ期の範囲即ち11世紀から12世紀前半の時期に入るものもあるのではないかと考えられる。このことは、今後、在地の土器の編年研究が進んだ上で、もう一度、検討してみたい。

Ⅳ期（13世紀中頃～14世紀中頃）

この時期の輸入磁器を出土する遺跡はⅡ期に比べると若干減少する。というよりは、むしろ、同一の遺跡内にあっても、この時期の遺物は減少する傾向がある。

この時期になると白磁ではA類に代わってB類が出現し、龍泉窯系青磁ではA類、B類が姿を消し、CⅠ類～CⅤ類の蓮弁文碗が主流を占めるようになり、又、褐釉壺・青磁盤・天目碗・青白磁梅瓶なども少量ながら含まれるようになる。

出土する遺構としては、墓出土のものが激減し、代わって集落内の溝あるいは、館跡の堀等からの出土が顕著になる。又、経塚も殆ど造られなくなる。

この時期の輸入磁器を出土した遺跡には、大屋町蔵垣遺跡、龍野市福田天神遺跡・宝林寺北遺跡、姫路市加茂遺跡、川西市満願寺跡などがある。

Ⅴ期（14世紀後半～15世紀）

この時期の輸入磁器は白磁では、碗AX類、皿AⅥ・Ⅶ類、青磁では龍泉窯系統のAⅡ・AⅢ類、BV類、CⅥ・CⅦ・CⅧ類、皿Ⅰ・Ⅱ類が主流を占めるようになる。しかも、これらの遺物を出土する遺跡の種類は山城あるいは館跡に限定され、その出土量もそう多くはない。これらの輸入磁器を出土した遺跡には、龍野市城山城跡、姫路市書写坂本城跡・御着城跡・英賀城跡・加茂遺跡、芦屋市三条岡山遺跡、神戸市如意寺塔頭跡、氷上郡春日町河津館跡、多紀郡丹南町初田館跡などがある。この時期の遺跡の特徴としては、遺跡数は多いものの、個々の遺跡での輸入磁器の出土量が非常に少ないという事である。この内、嘉吉3年（1443）年、嘉吉の乱で、廃絶した事が文献上で確認される城山城跡では、大規模な発掘調査は行われていないが、近年、城山城調査団による分布調査が実施され、白磁AV・AⅦ類、龍泉窯系青磁碗CⅥ・CⅦ・CⅧ類、香炉、天目碗などが採集され、この時期の良好な資料として注目される。

Ⅵ期（15世紀後半～16世紀後半）

この時期になると、それまで輸入磁器の主流を占めていた白磁・青磁に加えて、青花磁器が大量に搬入される様になり、出土量も飛躍的に増大する。この時期は、Ⅲ期と並んで、県下における輸入磁器の受容が2番目のピークを迎える時期と言える。但し、輸入磁器を出土する遺

跡の種類はⅢ期程豊富でなく、ほぼ館跡、山城・平城跡に限られる。

出土遺物には、森田分類白磁ⅢE群、白磁AⅦ類、青磁碗CⅨ類・D類、青磁ⅢⅡ類、青花碗・皿などがある。これらの遺物を出土した遺跡には、美方郡村岡町福西遺跡、飾磨郡夢前町置塩城跡、姫路市御着城跡・加茂遺跡・姫路城内遺跡、伊丹市有岡城跡、多紀郡西紀町内場山城跡、丹南町初田館跡、氷上郡春日町河津館跡、三田市釜屋城跡・中尾城跡、相生市感状山城跡、龍野市龍野城跡、豊岡市尼城跡などがあって、淡路を除く県下全域に分布している。ただ、分布の中心は現在の所、姫路市域を中心とした西播地区に集中しており、特に御着城跡では、白磁ⅢE群、白磁ⅢAⅦ類、青磁碗CⅨ類・DⅠ類などと共に大量の青花磁器が出土している。又、特別史跡姫路城跡内でも史跡整備等に伴う調査が、現在まで、数10次にわたって行われており、池田輝政築城以前の羽柴秀吉による初期城下町の状況が漸く明らかになりつつある。これらに伴って、瀬戸・美濃系の陶器と共に、呉須絵、赤絵等の16世紀後半代の輸入磁器が大量に出土している。

Ⅶ期（17世紀前半以降）

17世紀前半以降になると、肥前系の陶磁器が出現し、それらが中国製の陶磁器にとって代わることになるが、この時期については、最近まで、その実態は解明されていなかった。

近年、大坂城二ノ丸、あるいは堺環壕集落の調査を通じて、初期の肥前陶磁器に伴う輸入時期が漸く抽出されるようになり、その実態が解明されつつある。

県下では、先程述べたように、姫路城内遺跡、あるいは伊丹市有岡城跡、明石市明石城跡などの調査を通じて、この時期の輸入磁器が抽出されるようになってきた。ただ、まだ調査が継続中のものが多く、正式の調査報告書が刊行されたものは殆どないが、報告がなされているものとしては、県立博物館建設に伴う調査で出土した天啓青花芙蓉手昆虫図皿がある。

また、17世紀前半以降、肥前系陶磁器が主流を占めるようになった以降も輸入磁器の受容は少量ながら続いたようで、姫路城内遺跡では18世紀以降も新渡物と呼ばれる清代の青花磁器が搬入されていた事が確認されている。

以上、県下の輸入磁器の出土状況について、その概要を述べて来たが、以下これをまとめると次の項目にまとめられる。

1) 県下の輸入磁器の受容は少なくとも10世紀前半には始まっている。ただこの時期の搬入量は非常に少なく、出土遺跡も官衙もしくは官衙的性格をもった遺跡に限られる。

2) Ⅱ期すなわち11世紀前半から12世紀中葉の時期は、輸入磁器の受容の空白期である。現在の所、確実にこの時期のものと考えられる輸入磁器は確認されていない。ただ、この時期は輸入磁器のみならず、在地の土器の編年作業の進展に伴ってこの時期の輸入磁器の抽出が可能となる可能性は充分考えられる。

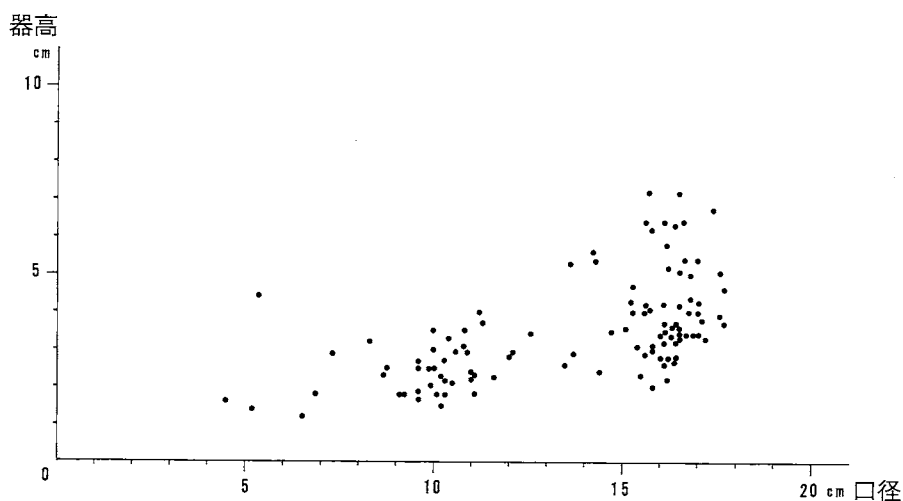
3) Ⅲ期すなわち12世紀後半から13世紀前半にかけての時期は、輸入磁器の受容は1回目の

ピークを終える。また出土地も集落のみならず、墓、経塚等にも多量の輸入磁器が副葬されている。ただ、Ⅲ期と報告されている輸入には、その出土のあり方に相違が認められ、今後この時期のものがさらに細分されるか、あるいは一部が先行するⅡ期に組み入れられる可能性がある。

4) Ⅳ期すなわち、13世紀中頃から14世紀中頃の時期は輸入磁器の受容がⅡ期に比べると減少する。このことは、この時期になると墳墓あるいは経塚への副葬が激減し、集落内での出土が、その大部分となることとも関連する。又、白磁の比率も少なくなり、ほぼB類に限られるようになる。青磁では、A類、B類に代わってC類の比率が増し、さらに盤などの大型製品がこれに加わるようになる。又、少量ではあるが、青白磁梅瓶、褐釉壺、天目碗なども含まれる。

5) Ⅴ期すなわち14世紀後半から15世紀の時期は輸入磁器の出土地は、山城、城館に限られる様になり、Ⅳ期に僅かに残っていた墳墓への副葬は殆ど見られなくなる。又、各遺跡での出土量もⅣ期と比べてもさらに少なくなる。白磁も少量ながら碗AX類、皿AⅥ・AⅦ類が出土しているが、主流は完全に青磁に移り、碗AⅡ・AⅢ・BⅤ・CⅥ・CⅦ・CⅧ類、皿Ⅰ・Ⅱ類が多く含まれている。また、この他にⅣ期に引き続き青磁香炉、天目碗などの出土が認められる。

6) Ⅴ期すなわち15世紀後半から16世紀後半の磁器は、輸入磁器の受容が再び急増し、Ⅲ期に次いで輸入磁器受容の2度目のピークである。



挿図380 福田片岡遺跡出土輸入陶磁器の法量